

# アートを拓く ②

## 志支えた「9回描き直し」

オバマ大統領が当選した2008年の米大統領選。その選挙戦で、オバマ氏に負けないうらい世界のメディアの関心を集めた「眼鏡美人」を覚えているだろうか。前アラスカ州知事で、共和党の副大統領候補だったサラ・ペイリン氏が愛用していた縁なしの眼鏡は、金沢美術工芸大の卒業生で、大阪大大学院教授の工業デザイナー川崎和男さん(61)がデザインしたものであった。



川崎さんデザインの眼鏡を愛用したサラ・ペイリン氏。A.P.

サラ・ペイリン氏の眼鏡をデザインした

工業デザイナー 川崎 和男 さん 61

多くの受賞歴があり、グッドデザイン賞の審査委員長も務めたが、金沢美大生時代は、授業に全くついていけず、何度もやめようと思った」と振り返る。

福井での高校時代は、医学部進学を目指していた。小説家にもなりたくて、「医師と作家の一足のわらじをはくつもりだった」という。

だが、浪人時代を過ごした大阪で、モダンアートの奇才・横尾忠則さんのイラストに出会い、心が揺さぶられた。「本より絵を描いた方が面白そうだ」と一転、金沢美大の産業美術科を受験し合格した。

だが、医学部に行くとはかり思っていた父親は「そんな道楽学校なんかに行くんじゃない」と激怒した。

父に反抗して美大生になったが、「おやじが言う『道楽』なんてもんじゃなかった。きつくてきつくて」。授業では徹底的にデッサンを直され、「石」と「石炭」の質感の違いを描く課題では「どっちが



「弾力性があるんですよ」とデザインした眼鏡を紹介する川崎さん(大阪大)

石だ？」と教授から叱責が飛んだ。ある課題では、9回もやり直しを命じられ、「自分には才能がない」と落ち込んでいたら、教授に呼び出された。「なぜ、こんなに描かされていると思う?」「僕が出来ないからです」。泣きそうになつて言うと、「違う。君に才能があるから、徹底的にトレーニングするんだ」。この言葉が、折れそうな心をつなぎ留めてくれた。

3年になる頃には少しずつ自信が持てるようになり、卒業後、工業デザイナーとして東芝に入社した。「振り返ると、今、自分でも学生にはこまめでしないなと思うぐら

い、厳しく教えてくれた。今の自分があるのは、美大の恩師たちのおかげ」

28歳の時、人生最大の苦難に襲われた。乗っていたタクシーに酒酔い運転の車が追突。脊椎を損傷して下半身不随となり、車いす生活を余儀なくされた。

心身ともに疲れ果て、数年後、失意のうちに東芝を退社、故郷の福井に戻った。だが、そこには新たな転機も待っていた。「東京にはないものを」とデザインした特産の眼鏡やナイフが次々にヒットした。

障害を持ったことで「デザイン」の力で不自由さから人を解放したいとの思いが募った。45歳の時、事故の後遺症で心臓発作を起こしたことをきっかけに、人工心臓のデザイナーにも取り組み、その結果、医学博士号まで取得した。

成功の一方で、心の重しとなっていたのは、父とのすれ違いだった。医学博士号を取って3年後、和解できないまま父は79歳で他界した。

葬儀に集まった父の友人たちに「おやじはちっとも理解してくれないまま逝ってしまった」とこぼすと、皆、かぶりを振って言った。「何言ってるの。酒を飲んだらアンタの話しかしなかったよ。『あいつは、車いすになりながら医学博士にまでなってくれた』って。父の本心を初めて知り、弔い酒に涙が落ちた。

川崎さんは「大学は、良い先生、良い友達に巡り合うことが学問よりもずっと大事」と語る。美大時代、9回のデッサン描き直しを命じた恩師は健在で、今も頭が上がりな

い。「先生が亡くなったら、おやじが死んだ時よりも泣くかも知れない」。照れくさそうな表情は、教授ではなく学生の顔に戻っていた。